

# 古代エジプト・ヘルモポリス州のハト ヌブに残されたネヘリ・グラフィティ について

西村 洋子

## はじめに

第1中間期(第6王朝末～第11王朝初)の州侯達の史料には、彼ら自身又は彼らの部下達が残した墓碑銘・供養碑・棺等がある。それらのうち主なものは、モアラのアンクティフィの墓碑銘、アシュートのケティー族の墓碑銘、ハトヌブのアラバスター採石場に 残されたグラフィティ (graffiti, 非公式の記録) である。これらの中で最初のもは、第6王朝末～第8王朝の上エジプト南部の社会状態を暗示し、第2番目のものは第10王朝(ヘラクレオポリス朝)の支配状況にふれている。そして第3番目のものは、ヘルモポリス州内の政治状況について教えてくれる。

さて、ヘルモポリス州では、エル・ベルシュエの墳墓群とハトヌブのグラフィティから、第1中間期から第12王朝まで断続して、州侯の存在が知られている。ヘルモポリス侯達は、この長期に亘って、十分に自治の風を享受したので、最も尊大な州侯だった。それ故、彼らの残した碑文・遺物を調査することは、州侯研究上極めて興味深い。しかし本稿では、彼ら全体の考察は後日に譲り、ヘルモポリス侯ネヘリと彼の2人の息子、カイとジェフティネケトにのみ焦点をあてることとする。

ハトヌブには、15のヒエログリフの碑文 (inscriptions) と52のヒエラティックのグラフィティが残されている。それらのうち第1中間期と中王国に属するものは、碑文Na 9～13とグラフィティNa 9～51である。さらにこれらのうちグラフィティNa 14～28は、ネヘリの在職年による日付をもち、ネヘリ・グラフィティと呼ばれる。これらのグラフィティはアラバスター採石隊のメンバーによって記された活動記録であるが、形式的には供養碑 (funeral stelae) に類似している。テキストは、<sup>①</sup> シェンケルが初期の中エジプト語 (frühmittelägyptisch) と呼ぶもので書かれている。そして関係代名詞・分詞で作ら

れた名詞句の羅列が大部分を占めている。語彙・書法は一貫しており、全く同じか類似の句が繰り返されている。血縁関係は、「息子」(sa)を挿入しないで、名前の並置によって表わされる。これらの点でネヘリ・グラフィティはこの時代・この地域に独特のものである。

では、テキストの内容をみてみよう。

## 1. ヘルモポリス侯の地位

ネヘリ・グラフィティは、ネヘリと彼の2人の息子のためのものと彼らの部下のためのものからなるので、両方の主張からヘルモポリス侯の地位をみるのに役立つ。テキストは主にエピセツト (epithet, 人物の修飾的説明)、道徳的記述、戦闘記述、飢饉に関する記述からなる。ではまず、ネヘリ達のもつ称号群を概観してみよう。

ネヘリは、日付の中で「伯、2つの王座の管理者、神官長、のうさぎ州(ヘルモポリス州の別名)の大首長、王都の長官、裁判長かつ宰相、上エジプト長官、王宮における伯達の第一人者」(Gr. 16—以下Gr. はgraffito あるいはgraffitiの略)、「王の知己、上エジプトの第一人者」(Gr. 20, 22)の称号群をもつ。まずこれらから、彼は「世襲貴族」(iry-pat)その他の位階称号をもっていないことがわかる。そして世俗の称号よりも神官職の称号が優先されている。ヘルモポリス侯達は、エル・ベルシェの墓碑銘や棺の銘文でも、まず「伯、2つの王座の管理者、神官長(又はトト神の偉大なウアブ神官)」の称号群を優先させている<sup>③</sup>。他の諸州では、古王国末以後世俗の称号が神官職の称号よりも優先されている。息子達はネヘリの墓(エル・ベルシェ第4号墓)では「下エジプト王の尚璽官」(sedjawty-bity)としか記されていない。けれどもカイはその他に「唯一の友、王都の長官、裁判長かつ宰相、王の知己」(Gr. 16, 24)の称号群をもつ。一方ジェフティネクトはその他に「唯一の友、神官長、トト神の偉大なウアブ神官」(Gr. 17, 23, 28)の称号群をもつ。これらから、カイは父親と同じ世俗の称号をもち、ジェフティネクトは神官職のみをもっていることがわかる。ネヘリは両方をもっているため、州の支配は実際にはネヘリの総監督の下にこの兄弟が共同で行っていたのであろう。ネヘリの後に侯位についたのはジェフティネクトであったので、神官職の保持がこの州では侯位につくための必要条件であったことがわかる。このことは、古王国時代において、王の行政上の職務が宰相に委託されたのに対し、王の神官としての職務は決して委託されなかったことを、思い出させる。続くテキストから、彼らの高位の称号群が単なる僭称であったとは思われない。

では次に、ネヘリのエピセツト群をみていこう。「全ての人々が死に絶え

た時、この国中に残っているケレヘト蛇、キャンプの強き若者、全ての場所への彼(王)の到着を護衛する者、評判高き力の主、彼と論争する者の発言をひっくり返す者、『会議の日が来る時、今や彼が命令する。この全土は彼が言う全ての計画の下に立っているのです』と王が言う者、真のトト神の息子、レー神の2つの九柱神によって生まれた者、真の雄牛の種、(省略)彼の町に愛される者」(Gr. 20)。「並ぶ者無き王の信頼者、彼に心が開く者。人々に知られることなく、彼は官僚達と一緒に会議へ連れてこられた。彼が言う計画の下で王都の住人達が満足した。王にとって信用できる者、上エジプトの支配者達が彼の下へ来た者、〔……〕、キャンプの強き若者、全ての場所への彼(王)の到着を護衛する者」(Gr. 25)。

前者(Gr. 20)の記述の中には異例の表現がみられる。「ケレヘト蛇(Kerehet)」とは、世界創造の前に創造神アトゥムがとって現われた姿で、彼は世界を滅した後再び蛇の姿に戻るという。それ故州侯達が血統の古さを誇るためにこの表現を使った。「レー神の2つの九柱神によって生まれた者(mes en pesedjety Re)」は、彼が神の血筋を引いていることを示す。「真のトト神の息子(sa Djehwty en wn maa)」は、トト神の神官長のエピセツトであるが、神官長でないカイもこれをもっている(Gr. 24)。それ故、このエピセツトはヘルモポリス侯の地位を表わすものである。「真の雄牛(ka maat)」はトト神を指す。「真のトト神の息子」と「真の雄牛の種」は、「レー神の息子(sa Re)」を思い出させるが、単なる王の称号の模倣というよりも、神官職とのより密接な結合による州侯職の発展を示している。彼らの神官職に関する記述は、Gr. 17, 24, 26に詳細に見られ、かつて王だけの権利であった儀式の執行権をもっていたことがわかる。

後者(Gr. 25)の記述の後には戦闘記述が続き、戦闘に至る国家の危機の切迫感と、ネヘリに対する絶大な信頼感が感じられる。そして彼が王に対して特別有力な地位を占めたことを示している。しかし王との関係に言及した表現はこのエピセツト群だけであり、そこには王に対する反抗心は見られない。

カイは父ネヘリについて次のように言っている。「我(カイ)こそは、強く賢い人、ずっと彼(ネヘリ)の町を見守った者、それ(町)を繁栄の道の上に置いた者、〔……〕、永遠に見守る者、王と彼(王)の官僚達の知己、並ぶ者無き唯一の人、上エジプトがおじぎして彼(ネヘリ)の下に来た者、の息子だった。我(カイ)こそは、〔……〕のない者、威厳の大きい畏怖の主、評判高き恐怖の者、親しみある顔と善良な性格の者、悪の本性がない清い考えの者、この国が彼(ネヘリ)に対する愛をもつ者、神殿への行列の日には彼(ネヘリ)の群像の接近の時、人々と神々が喜んだ者、(省略)、の息子だった」(Gr. 24)。

これらの表現は、ネヘリが彼の町の繁栄に尽力し、それ故民衆の尊敬が大きかったことを示している。息子達はネヘリのものと類似のエピセツ群をもつが、カイは道徳的な面を、ジェフティネクトは神の血筋を、より強調している。

次に部下達のグラフィティをみてみよう。Gr. 14で、船団長ネチェルヘテプは、「王家のための任務を行なう我が御主人様（ネヘリ）のために」デルタからエレファンティンまで行き来し、自分が任務を果たし終えると、「王家の官僚達は、官庁内での我が御主人様の人気が非常に高いので、喜んだ」と述べている。彼は73才まで仕えた。そして「私が今言ったこと全ての中には、ケミの子ネヘリに誓って、うそはない」と言っている。Gr. 22では、園丁長セベクエムハトは、「私は伯ネヘリ一生命、繁栄、健康あれ／＼の時代に園丁長になった。彼の下での私への寵愛は、私の息子・兄弟よりも大きかった。彼は私をかつてのように私への尊敬を繰り返させた。私は、人をして私（の中）に全ての（他の）場所の庇護を見させることなく、彼の家で彼の下で勤務した。彼は、私が彼の下に王家のアラバスターをもって来るように、私をハトヌブへ送った（?）」と述べている。そして「ケミの子ネヘリに誓って、私は正しく話す」と言っている。

これらのグラフィティには、古王国時代の高官達の墓碑銘において王に対する忠誠と感謝の念があふれているように、ネヘリに対する忠誠と感謝の念があふれている。そしてネヘリの名前の後には、本来王にしか与えられない讃辞、「生命、繁栄、健康あれ／＼ (ankh wdja seneb)」が付加され、テキストの最後では、テキストの内容が真実であることが、ネヘリに誓われている。ネヘリ・グラフィティ<sup>⑧</sup>全体で、「永遠に生きますように／＼ (ankh djed)」<sup>⑨</sup>、「声正しき者 (maa kherw)」<sup>⑩</sup>、「永遠にレー神の如く彼の周囲に加護と生命（があらんこと）を／＼ (sa ankh ha.ef mi Re djed er neheh)」という讃辞が与えられている。日付が王の治世年によってではなく、ネヘリの在職年によって記されていることは、先に述べた通りである。王の医師であるヘリシェフネクトでさえ、そうしている (Gr. 15)。恐らくネヘリの時代には、既にこれらのことが慣習として定着してしまっていたのであろう。より古王国時代に近いヘルモポリス侯イハも、名前の後に「生命、繁栄、健康あれ／＼」の讃辞を付加されている。そして王が誰であろうと、州の内政は順調に行なわれていたように思われる。

ネヘリ・グラフィティが示していることは、平時にはヘルモポリス侯は州の独立君主として州の繁栄に尽力し、非常時には王の第1の家臣として国家の危機回避に尽力した、ということである。但しネヘリの在職年による日付は最高8年までなので、彼の在職期間も8年ぐらいと考えられる。それ故、

グラフィティの内容が事実ならば、彼はその短期間のうちに精力的に活動したのであろう。そしてエル・ベルシェに彼の墓が残っているので（第4号墓）、墓を築くために必要な資力と職人達が自由になるほど、彼が有力だったことは確かである。

## 2. ネヘリ・グラフィティの年代

ハトヌブのグラフィティを刊行したアンテスは、ネヘリとアシュートのケティ2世がもつ称号の類似性<sup>⑩</sup>から、ネヘリの年代を第10王朝末、つまりエジプト再統一の直前に仮定した。グラフィティの内容は、その時期の社会状態と合致するので、彼の仮定は広く受け入れられてきた。但し戦闘記述の解釈には、学者達の間で相違がみられる。アンテスはそれを、ヘルモポリス州内のヘラクレオポリス王の軍隊内の部隊間の争いか、あるいはヘルモポリス州のすぐ南でのヘラクレオポリス朝とテーベ朝との決戦<sup>⑪</sup>であると考えた。シュトックはネヘリをテーベ軍を撃った人物である<sup>⑫</sup>と考える。ヘイズは、両軍の戦闘のさ中、彼の支持する王の軍隊の援護もそこそこに、州民達を守るのに尽力した人物である<sup>⑬</sup>、と考える。ガーディナーはヘルモポリス州内での反乱を想像している<sup>⑭</sup>。フォークナーはネヘリ達をヘラクレオポリス朝に対する反乱者と考える<sup>⑮</sup>。

しかしシェンケルは、彼の博士論文で、ネヘリ達を第12王朝のアメンエムハト1世とセンウセレット1世の時代に割当て、かの戦闘は王位交代の際の争乱を示す<sup>⑯</sup>、と発表した。彼の見解はユングによって、『エジプト学事典』の「エル・ベルシェ」の項目で、取り上げられている。その後ブルーメンター<sup>⑰</sup>ルが用語法 (phraseology) 上の研究から、プロバルスキが考古学上の研究から、アンテスの仮定を再び支持している。ここでは、彼らの考察を順にみてゆく。

### a. シェンケル説

シェンケルは、古文書学 (paleography) の立場から、第1中間期の政治史にとって重要なテキストの年代を、従来の誤まった通説から正し、それによってテキストの正しい解釈を試みようとした。

ネヘリ・グラフィティを第12王朝に割当てることになった主なポイントは、次のようである。

- 1) ネヘリの墓碑銘の中の書物のサインには 紐の結びはしがある (Y<sup>⑱</sup> 1)。これは第12王朝以降証明される形で、第11王朝までは結びはし

はなかった (Y 2)。

- 2) ネヘリ・グラフィティでは独立代名詞の 1 人称は限定詞 (A 1) を伴うが、第 12 王朝までは限定詞を伴わなかった。
- 3) 接尾代名詞の 1 人称 (A 1) の規則的な使用がみられるが、これはセンウセレット 1 世時代に一般的となった。

彼はさらに、センウセレット 1 世の治世 31 年の日付をもつ Gr. 49 の記述、「カイの息子である ネヘリの息子であるアメンエムハト [……]」から、ネヘリは遅くともアメンエムハトの 3 世代前に生きていて、それはアメンエムハト 1 世の治世中のことである、と考えた。そしてネヘリは王位交代の争いの際、センウセレット 1 世に味方したと考える。

#### b. ブルーメンタール説

ブルーメンタールはいくつかの方法から正確な年代決定を試みている。まず系図学 (genealogy) から。しかしこれには次のような問題点がある。

- 1) 同名者が多すぎる。10 人のアハネケト、7 人のネヘリ、19 人のジェフティネケト、9 人のジェフティヘテプが知られている。
- 2) 全てのヘルモポリス侯達の名前が知られているわけではない。
- 3) 全ての知られている人物が血縁づけられるわけではない。
- 4) 州侯職は常に父から子へ世襲されているわけではない。

以上の諸問題点から、アンテスが作成したヘルモポリス侯の系図にも、シェンケルの系図にも、共に無理な仮定がある。

次に古文書学から。彼はシェンケルの研究を賞讃しながらも、次の点からネヘリの年代決定に難色を示している。

- 1) シェンケルの指標はヒエログリフのテキストにのみ有効であるが、ネヘリ・グラフィティはヒエラティックで書かれている。
- 2) エジプト学初期の報告書は、古文書学上の細部に注意を払って原文を写していないので、写真・現物に基づかない判読から重大な推論をすることは危険である。

エジプト語とその文字の歴史において明確な分離線はない。特に第 1 中間期の中部諸州では変形・特殊例が生じては消えていった。古エジプト語から

中エジプト語への移行が終了するのはアメンエムハト1世時代である。ネヘリ・グラフィティの年代は、この移行の終わりでも始まりでも考えられうる。

次に考古学から。史料は墓の平面図、壁画・墓碑銘の碑文の断片が知られている程度である。隣州のベニ・ハサンの墳墓群の様式との比較が必要であるが、次の点に注意しなければならない。

- 1) 何人もの画家が働いたので、1つの墓の中で様式の不統一が起きている。<sup>20</sup> 故に様式の相違は年代の相違とは必ずしも一致しない。
- 2) ベニ・ハサンとエル・ベルシェの両墳墓群の様式の発展が並行していることが証明されなければならない。

ネヘリ・グラフィティに添えられた人物像は、長い上半身と大きな目をもつかくばった姿で、第12王朝の調和のとれた様式とは異っている。

次に用語法から。ネヘリ・グラフィティ全体にみられる社会的・道徳的記述は、第1中間期から第12王朝まで続く。それ故、ブルーメンタールは、第12王朝にはもはやみられず、第1中間期の自伝にのみ共通してみられるものを探そうとする。

- 1) 「ケレヘト蛇」。注5参照。
- 2) 「～の第一人者 (hat)」。シェンケルは第12王朝に現われた例として、ジェフティネクト (エル・ベルシェ第1号墓) の称号「上エジプトの第一人者、伯達の第一人者」と、ベニ・ハサンの墓碑銘の中の任命の決まり文句「上エジプトの地の第一人者にする (redi er hat net ta Shema)」を提出する。<sup>21</sup> ブルーメンタールは、モアラのアンクティフィとデンデラのネフェルウカイト女王がもつエピセット「人々の第一人者 (hat remetjw)」を提出する。<sup>22</sup>
- 3) 避難所としての州侯の位置づけ。「要塞 (nehet)」・「庇護 (shwt)」という表現は、アンクティフィとケティ2世の墓碑銘にもみられる。
- 4) 物質的豊かさの表現。アンクティフィと神官長メンチュヘテプは、穀物神ネプリ・亜麻神タイトとの関連で表現される。<sup>23</sup>
- 5) 人望の表現。アンクティフィは同時代の人々から、神官長メンチュヘテプは王と王の友達から信頼される。
- 6) 活動範囲。ヘルモポリス侯とアシュート侯の活動範囲は市と州内である。ネフェルウカイト女王は上エジプトで、再統一前の中級官吏達は彼が派遣された町で活動した。

彼はこれらの点でネヘリ・グラフィティは再統一前に属するとする。しかしアンクティフィとアシュート侯の自伝、中級官吏達の自伝の中の彼らの主人に対する表現を、さらに詳しく比較検討すべきであると提議している。

### c. プロバルスキ説

彼は、1915年に行なわれたハーバードーボストン隊によるエル・ベルシェでの調査をもとに、ネヘリの直接あるいは少し前の前任者アハネクトの年代を決定することにより、ネヘリの年代を推定している。

まずアハネクトとネヘリの年代の近さは次のようなことから証明されている。

- 1) Gr. 31でネヘリの息子ジェフティネクトに仕えたカーヘテプは、アハネクトとネヘリに言及している。
- 2) アハネクトとネヘリの墓は、共に前室と奥室からなる平面図をもつ。様式的には壁面にケケル飾帯 (kheker-frieze) をもたないアハネクトの墓の方が古い。

彼はアハネクトを次のような点から第12王朝より前に年代づけた。

- 1) アハネクトの棺の装飾は簡素で、供養文 (peret kherw) の配置はヘラクレオポリス期と第11王朝の流行に一致している。第12王朝には多彩色で色どられる。
- 2) ハトヌブ・グラフィティの №10～12は、アハネクトの在職年による日付をもつ。しかし Gr. 49はヘルモポリス侯の在職年ではなく、センウセレト1世の治世年による日付をもつ。
- 3) アハネクトの自伝の中の「冷静な者 (sak-ib)」・「痛ましい言葉の日 (herw medet kesnet)」等の表現が、アンクティフィ、テーベ王ネクトネブテプネフェルの同時代人、アビュドスのイディ・ネケティの自伝にもみられる。
- 4) アハネクトとネヘリの墓の図像は、ベニ・ハサンのバケトの墓 (第15号墓) とケティの墓 (第17号墓) の図像によく似ている。例えばグリフィン、乳兄弟等。ベニ・ハサンの2つの墓の年代は、茎がまっすぐのロータスの蕾あるいはロータス形の権標と携帯用の日よけの図像から、第11王朝初めに割当てられる。但し、シェンケルはこ



れらもまた第12王朝に割当てている。<sup>⑧</sup>

ブルーメンタールからプロバルスキへと調査研究が綿密になればなるほど、ネヘリ・グラフィティの年代は、アンテス説に有利である。シェンケルの彼らに対する反論は、まだみられない。

### 3. 戦闘記述の歴史的意義

ブルーメンタールとプロバルスキは、ネヘリ・グラフィティを第1中間期に割当てはしたが、戦闘記述に関しては何の言及もしていない。ここで再びテキストに戻って、その歴史的意義を再考してみたい。

「(既に)私(カイ)が子供だった時には、私にとってかわる者はいなかった。私は私の青年部隊を武装させて、私の町と共に戦うために出発した。私は沼沢で〔そのしんがりをする〕者だった。その時私の従者達を除いて私と共にいる者はいなかった。メジャウ、ウアアウト、〔…、…〕、上・下エジプトが私に対して団結した(?)。私は幸運な成功の後戻ってきた。〔……〕私の町全体は、何の損失もなく、私と共にいた。私はしかししみじめな者を強者から守る者だった。私は闘いの日にびくびくしてやって来る者全てのために私の家を入口にした」(Gr. 16)。「私(ジェフティネクト)は略奪の日に私の町を王家のひどい恐怖から救った。私はしかし戦いの日にその(町の)要塞であり、沼沢の中のその(町の)避難所だった。私はそれ(町)を生かし、何もない時、国土の飢饉の中でそれ(町)は養われた」(Gr. 23)。「私(カイ)はその(町の)青年部隊を徴募した。その(部隊の)総数を多くするために。しかしその部隊は市民達の中に入り、彼らの家に住んでいた。彼らは王家の恐怖の時代には出征しなかった。私は略奪の日に私の町を王家のひどい恐怖から救った。私はしかしその戦いの日にその(町の)要塞であり、沼沢の中のその(町の)避難所だった。のうさぎ州の支配者の息子、全く富者にして偉大なる者。私はしかし私の町全体を、何もない時に、国土の飢饉の中で生かした」(Gr. 24)。

これらの戦闘記述の後には飢饉の記述が続く。また Gr. 20では両方の記述が入り混じっている。それにしても気になるのは「私の町を王家の恐怖から救った (iw nehem.en.i niwt.i em heret net per neswt)」という表現である。ネヘリは Gr. 25で王から軍隊を整えるよう命じられているし、Gr. 26ではジェフティネクトが「戦いの日に王の軍隊を元気づける強き若者 (nedjes ken en hedj en her sekwen neswt herw aha)」と自負している。これらの表現は矛盾しているように思われる。また「メジャウ、ウアアウト、〔…、…〕、上

・下エジプトが私に対して団結した(?) (Medjaw Wawat …… Shemaw ta Mehaw semaww (?) er.i)」という表現がある。ということだろうか。

まず、テーベ朝はこの戦闘には何の関係もないだろう。というのはヘラクレオポリス朝がテーベ朝を指すのに使う言葉「南部」<sup>③</sup>がみられないからである。「王家の恐怖」の箇所だけテーベ朝を指し、他の部分ではヘラクレオポリス朝を指すというのは矛盾している。一方、ネヘリ達がテーベ朝の味方だったこともありえない。ヘラクレオポリス王メリカレの治世まで、少なくともアシュート侯の支配するリコポリス州以北が、ヘラクレオポリス朝の支配下にあったので。従来、第1中間期の史料は、ヘラクレオポリス朝とテーベ朝との抗争に関連づけて解釈される傾向があった。しかしモアラのアンクティフィが第9王朝からそれ以前に年代がひき上げられたように<sup>④</sup>、ネヘリもアシュート侯ケティ2世の同時代人ではなく、彼よりも少し早いかもしれない。

ヘラクレオポリス朝は、第9王朝・第10王朝をあわせて約120年間を17人の諸王が統治したと推定されている<sup>⑤</sup>。しかし彼らのうちその存在を証明するものが残っているのは、メリブレ・ケティ、ネブカウレ・ケティ、ウアフカレ・ケティ、メリカレの4人だけである。2人のネフェルカレ王は、どちらも、アンクティフィの年代がひき上げられた以上、彼が言及しているネフェルカレ王ではない<sup>⑥</sup>。第10王朝の創始者といわれてきたメリハトホル王は、メリブレ・ケティの読み違いの可能性がある。このような状態なので、約120年の間の出来事を全てこの4人の諸王の誰か、特にメリカレ王の治世にのみ割り当てることは正当でない。しかし前章でみてきたように、ネヘリ・グラフィティはヘラクレオポリス朝と第11王朝の史料に多くのパラレルをもつので、ネヘリが第10王朝に割り当てられることに疑いはない<sup>⑦</sup>。但し、彼が王名に言及していないので、どの王の治世に割り当てられるべきかは確言できない。

では、この戦闘記述が両王朝の抗争に直接関係ないとすれば、何の事件を示しているのだろうか。戦闘への言及はネヘリの在職年5～8年の日付のグラフィティにみられる。戦闘が起こった日は、「闘いの日 (herw haayt)」・「略奪の日 (herw awa)」・「戦いの日 (herw aha)」・「戦闘の日 (herw er-djaw)」<sup>⑧</sup>・「沼沢の日 (herw shedyt-sha)」と呼ばれている。しかしこの戦闘は1日だけではなく、4年の間頻繁に起こったのだろう。各グラフィートの記述は表現がよく似ているので、同じ1つの事件を示しているようにみえる。しかし実際には種々の原因による複数の事件を示している。その原因とは、軍隊内の争い、砂漠民の侵入・略奪、飢饉による暴動である。そして戦闘が起こる

度に町が巻き添えになり、州民は沼沢に逃げこんだり、ネヘリの邸宅に助けを求めていった。「王家の恐怖の時代 (rek senedj en per neswt)」という表現は、このような不安な社会状況から国中に戒厳令が敷かれていたことを示すかも知れない。そして「私の町を王家の恐怖から救った」というのは、ネヘリ達がめざましく活躍したので、もちろん恐らく他の州や町ではその支配者達が活躍して、戒厳令の解除に至ったことを示すのであろう。そして戒厳令解除後は荒れた町の再建と植民活動が行なわれたであろう。Gr. 25で「トト神は全ての彼(トト神)の諸市の建設のためにその終わりを準備した」と記されているので。アンクティフィのテーベ・コプトス両州との戦いの後の、イウシェンシェン市の再建のように<sup>④</sup>。ネヘリの活動はエジプト国外でも評価された。Gr. 25で「彼(ネヘリ)への愛は、メジャウ、アアウム、セティウ(?)達(の心の中)に入り(こんでいる)」と言われているので。

テーベ朝とヘラクレオポリス朝との決戦は、ネヘリの息子ジェフティネクトの在職期間以後であろう。ジェフティネクトは在職2年めにしか探石隊を派遣していないし<sup>④</sup>、彼の墓は残っていない。そしてその後ハトヌブにグラフィティが記されるのは第12王朝なので。

## む す び

ネヘリ・グラフィティは、他の多くの歴史史料と同様、テキストが短く、表現が曖昧かつ誇大である。それ故、その内容の解釈は非常に困難なこととなっている。しかしヘルモポリス州は他の中部諸州と比べて遺物の出土量が多いので、それらからテキストの歴史的な位置づけのための援助が得られる。本稿は、ネヘリ・グラフィティの内容解釈と年代決定の議論に、浅学ながら挑戦したものである。その結果次のような結論を得た。ネヘリ・グラフィティは、第1中間期の不毛の時代に、どれだけ州侯達の独立の活動が有益だったかを示すものである。エジプトの有力者達が嘆くのをやめて<sup>④</sup>国家再建に努力しているのがうかがわれる。彼らの活動のおかげで、エジプト文化は絶えなかったのである。再統一後の時代には彼らの独立の活動は王にとって目障りであったであろうが。しかし州侯達があえて王権を打倒しようとしたり、王を名乗ることはなく、それを行ったのは第11王朝を始めたテーベ侯だけであった。テーベ侯の興隆の要因は未だ不明である。この点については今後の研究が待たれる。

## 凡 例

引用文中の記号は次のように使用する。

[…] : 原文の断欠を示す。

[訳] : 原文は断欠しているが、他の箇所から推定したことを示す。

(訳) : 筆者の補足を示す。

## 略 語 表

*AoF* : *Altorientalische Forschungen*, Berlin.

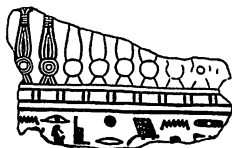
*CGC* : *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire*, Le Caire.

*JEA* : *The Journal of Egyptian Archaeology*, London.

## 註

- ① №29は日付をもたないが、ネヘリに対する宣誓がみられるので、ネヘリの時代に含まれると考えられる。
- ② Wolfgang Schenkel, *Frühmittelägyptische Studien* (Bonn, 1962), p. 20. 彼によれば、それは古王国以後第12王朝初めまで使われる。
- ③ Edward Brovarski, "Ahanakht of Bersheh and the Hare Nome in the First Intermediate Period and Middle Kingdom," in *Studies in Ancient Egypt, the Aegean, and the Sudan; Essays in Honor of Dows Dunham on the Occasion of his 90th Birthday, June 1 1960* (Boston, 1981), p. 23.  
F. L. Griffith and Percy E. Newberry, *El Bersheh*, 2 vols. (London, 1892-94).
- ④ *El Bersheh*, II, p. 29.
- ⑤ アシュート侯ケティ2世、デンデラのネフェルウカイト女王も「ケレヘト蛇」を称している。
- ⑥ Rudolf Anthes, *Die Felseninschriften von Hatnub* (Leipzig, 1928; rpt. Hildesheim, 1964), p.45.
- ⑦ Gr. 17, 19, 22, 23, 24, 25, 26, 28.
- ⑧ Gr. 23, 24, 25, 28.
- ⑨ Gr. 16, 17, 20, 23.
- ⑩ ネヘリ : 「王宮における伯達の第一人者」「王の知己」「上エジプトの第一人者」。  
ケティ2世 : 「伯達の第一人者」「王の知己」「上エジプトの大首長」。Siut tomb IV, 23, 57-8.
- ⑪ Anthes, pp. 92-3.
- ⑫ Anthes, p. 96.

- ⑬ Hanns Stock, *Die Erste Zwischenzeit Ägyptens* (Rome, 1949), p. 62 ff.
- ⑭ William C. Hayes, "The Middle Kingdom in Egypt: Internal History from the Rise of the Herakleopolitans to the Death of Ammenemes III" in *the Cambridge Ancient History* (以下 CAH), I, part 2 (3rd ed. Cambridge, 1971), pp. 470-1.
- ⑮ Alan Gardiner, *Egypt of the Pharaohs; An Introduction* (1961, rpt. Oxford, 1978). pp. 114-5.
- ⑯ R. O. Faulkner, "The Rebellion in the Hare Nome," *JEA*, 30 (1944), pp. 61-3.
- ⑰ Schenkel, pp. 84-95. それ故 Schenkel は彼の *Memphis · Herakleopolis · Theben; Die epigraphischen Zeugnisse der 7.-11. Dynastie Ägyptens* (Wiesbaden, 1965) にネヘリ・グラフィティを挙げていない。
- ⑱ Friedrich Junge, "El-Bersheh" in *Lexikon der Ägyptologie* (以下 LÄ), I (Wiesbaden, 1975), 713-4. しかし, LÄ II (1977) で "Hatnub" を担当した William Kelly Simpson と "Gaufürst" を担当した Henry George Fischer は Schenkel の説に否定的である。
- ⑲ Elke Blumenthal, "Die Datierung der Nḥri-Graffiti von Hatnub; Zur Stellung der ägyptischen Gaufürsten im frühen Mittleren Reich," *AoF*, 4 (1976), pp. 35-62.
- ⑳ Brovarski, pp. 14-30.
- ㉑ Alan Gardiner, *Egyptian Grammar; Being an Introduction to the Study of Hieroglyphs* (3rd ed, Oxford, 1979) の Sign-list で各サインに与えられた記号。
- ㉒ Beni Hasan tomb II, III.
- ㉓ アスワンのサレンプウト 1 世, ベニ・ハサンのアメニ, ハピジェファイ。
- ㉔ Schenkel, p. 85.
- ㉕ Jacques Vandier, *Moalla; La tombe d'Ankhtifi et la tombe de Sébekhotep* (Le Caire, 1950). I β 2, II α 2.
- ㉖ CGC 20543 a 10. テーベ王イニイテフ 3 世の同時代人あるいは彼の妻かもしれない。
- ㉗ London U. C. 14333/7-8. 第11王朝 (Vandier) か, あるいは第12王朝初め (Schenkel) に属する。
- ㉘ El Bersheh tomb V.
- ㉙ *El Bersheh*, II, plate XI.



} kheker-frieze

- ㉚ Philadelphia E 16217/16218.
- ㉛ Brovarski, p. 18.

- ⑳ CGC 20502.
- ㉑ Schenkel, p. 83.
- ㉒ 『メリカレ王のための教訓』：a resy「南部地方」(Petersburg Papyrus 1116A, 71 & 75).  
アシュート侯イティイビの墓碑銘：sepawt reswt「南部諸州」(Siut tomb III, 16).
- ㉓ Naguib Kanawati, *Governmental Reforms in Old Kingdom Egypt* (Warminster, 1980), pp. 106-7. しかし、彼の説が完全に認められたわけではない。
- ㉔ Hayes, *CAH*, I, part 2, p. 996.
- ㉕ *ibid.*, pp. 464-8.
- ㉖ Vandier, p. 263.
- ㉗ Brovarski, p. 22. 彼はアシュート出土の銅製品がもつメリイブレ・ケティのカルトゥーシュにおいて、Re と ib のサインがくっついていることに注目し、ハトヌブの碑文 Na 9 のカルトゥーシュにおいても、それがハトホルのサイン (C9) と見まちがえられたとする。この銅製品については、W. M. Flinders Petrie, *A History of Egypt from the Earliest Times to the XVIIth Dynasty* (London, 1899), fig. 66 をみよ。また Schenkel は § 12 で C9 のサインは第 11 王朝終りまで使用例がないと言っている。
- ㉘ ヘラクレオポリス朝では、宰相職は第 12 州のヘムレ・イシとその弟のヘンク、第 9 州のヘルウィの後、この州のアハネクト、ネヘリ、カイの順に移ったのだろう。アハネクトが宰相職をもつことは Brovarski, p. 18 をみよ。筆者は彼らの年代を吟味することによって、ネヘリの年代をより明確に限定できるのではないかと考える。
- ㉙ Gr. 16, 20, 23, 24, 25, 26.
- ㉚ 筆者にこのような靈感を与えたのは、1986年2月19日～3月3日のエジプト旅行での暴動事件の体験である。
- ㉛ Alan Gardiner, "A Stela of the Earlier Intermediate Period," *JEA*, 8 (1922), plate XVIII.
- ㉜ Gr. 32 の日付の中のジェフティヘテブを、Möller の読み通りにジェフティネクトと読むならば、彼は少なくとも 20 年間在職し、ハトヌブへ 2 回採石隊を派遣したことになる。Brovarski は p. 27 n. 107 で Möller の読みを支持している。
- ㉝ 『イプウルの訓戒』のこと。

表 ネヘリ・グラフィティ一覧表

Gr. No.	日付	所属	備考
14	ネヘリ4年め	船団長ネテェルヘテブ	
15	同上	王の医師ヘリシェフネ ケトとサクメトの神官 アハネケト	
16	ネヘリ5年め	ネヘリの息子カイ	戦闘記述やや詳細。
17	同上	ネヘリの息子ジェフテ ィネケト	神官職の記述やや詳細。
18	同上		Gr. 16と17を記した書記のメモ。
19	同上	金細工師アハネケト	
20	ネヘリ6年め	ネヘリ	戦闘記述やや詳細。王の言葉あり。
21	同上		Gr. 20を記した書記のメモ。
22	ネヘリ7年め	園丁長セバクエムハト	
23	同上	ネヘリの息子ジェフテ ィネケト	戦闘記述あり。
24	同上	ネヘリの息子カイ	戦闘記述あり。神官職の記述あり。
25	同上	ネヘリ	戦闘記述やや詳細。王の言葉あり。
26	ネヘリ8年め	ネヘリの息子ジェフテ ィネケト	神官職・戦闘記述あり。
27	同上	ウアブ神官ケネムヘテ ブ	
28	同上	地区監督官レヌウ	
29	日付なし	無名の地方官吏	ネヘリに宣誓している。